

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督・脚本：フィリップ・シュテルツェル

出演：ベンノ・フルマン / フロリアン・ルーカス / ヨハンナ・ヴォカレク / ジーモン・シュヴァルツ / ゲオルク・フリードリヒ / ウルリッヒ・トゥーケル

アイガー北壁

2008年・ドイツ、オーストリア、スイス合作映画
配給 / ティ・ジョイ
127分

2010 (平成 22) 年 2 月 3 日鑑賞

東映試写室

👁️👁️ みどころ

『八甲田山』(77年)が実話にもとづいた映画なら、本作もそう。また、「天は我々を見放した」と絶叫したくなる悲しい結末も同じ。そもそも、人間が厳しい自然に挑むこと自体が問題なの？ 思わずそんな感慨も・・・。

日本陸軍の威信を賭けた「雪中行軍」と同じく、1936年の北壁への挑戦はナチスの威信を賭けたものだが、人間ドラマが動くのはそれとは別次元。これぞ新聞記者魂！という人物との対比を含め、悲しい結末から浮かびあがる人間ドラマを堪能したい。

* * * * *

『劔岳 点の記』は大成功！『アイガー北壁』は？

1907(明治40)年の日本帝国陸軍参謀本部陸地測量部の威信を賭けた劔岳への登頂は見事に成功した(『シネマルーム22』250頁参照)。しかし、1936年8月のベルリンオリンピック開催を目前に控えた1936年7月に、ナチス政権による国威発揚に燃える中で敢行された、ドイツ人の登山家トニー・クルツ(ベンノ・フルマン)、アンディ・ヒンターシュトイサー(フロリアン・ルーカス)とオーストリア人の登山家ヴィリー・アンゲラー(ジーモン・シュヴァルツ)、エディ・ライナー(ゲオルク・フリードリヒ)による、アイガー北壁への挑戦は？

撮影の過酷さは『劔岳 点の記』以上？

去る1月26日新聞紙上で、2009年の国内映画の興行収入が2006年以来3年

ぶりに2000億円を突破したこと、邦画VS洋画の比率が56.9%VS43.1%となったことが報じられたが、私には邦画のトップが『ROOKIES -卒業-』（09年）の85.5億円というのが少し心配。他方、地味な映画だっただけに興行的な成功が心配された(?)『劔岳 点の記』（08年）は年配者に愛されたためか興業収入は25.8億円で20位と予想以上の大健闘。

『劔岳 点の記』撮影の「行(ぎょう)のサマ」は『キネマ旬報』に連載している香川照之の「日本美録」114と115に「第一次木村軍事政權誕生」「音を上げているのはこの膝かい?」と面白い言葉で紹介されていたが、これぞまさに香川照之の本心。よくぞまあこんな気持ちがよいじみた撮影を敢行したものだ。ところが、『アイガー北壁』撮影の苛酷さは『劔岳 点の記』撮影以上?

なぜなら、前述のように劔岳への登頂が成功したから撮影の苦勞は吹き飛んでしまうだろうが、アイガー北壁への登頂はみごとに失敗。しかも、挑戦した4人の登山家は最後に一人残ったトニーさえもロープで宙ぶりにされた状態で誰も助けることができず命を落としてしまうのだから。

進むべきか? 退くべきか? それの問題だ!

1936年7月18日午前2時、絶好のコンディションの中で登頂を開始したドイツ隊のトニーとアンディは元気いっぱい。これに少し遅れて出発したオーストリア隊のヴィリーとエディも途中から行動を共にすることとなったが、「我こそが一番乗り!」と意気込む2組の登山家たちの姿をみていると、アイガー北壁登頂なんてチョロイのでは? とつい思ってしまう。

しかし、1回目のピバーク(登山で、露営すること)は安泰だったものの、女心と同じく(?)変動の激しい山の天気は大変で、2回目のピバークは? そんな中で顕著になったのは、進むべきか、退くべきか? の判断。その第1関門は、ヴィリーが落石によってケガをした時。その傷を見た相棒のエディは「下山すべきだ」と説得したが、ヴィリーは断固としてこれを拒否。しかし、頭部に受けた傷は意外に重く、苛酷な状況になるにつれてヴィリーの行動力は? 第2関門は、ドイツ隊のアンディが見事な絶壁のトラバース(登山で、岩壁や山の斜面を横切って進むこと)を成功させた直後。すなわち、「下山のためにザイル(登山用の綱)を残しておくべきだ」と主張する慎重派のトニーに対して、突進派のアンディは「前進あるのみ!」と主張して結局ザイルを回収することに。さて、その判断の当否は?

そして第3関門は、猛吹雪の中ほとんどダウン状態となっていたヴィリーに事故が起き、完全に歩行不能状態になった時。ここでも登頂をあきらめられないアンディは「前に進むべきだ」と主張したが、このまま進めばヴィリーの命がないことは明白。そこで下した「退くべき」という冷静な判断はさすが百戦錬磨の登山家で立派なもの。といっても、全く歩けない状態のヴィリーを連れてどうやって4人で下山するの? 猛吹雪の中、進むも地獄な

ら退くも地獄なのでは？

なるほど、これが新聞記者魂！

本作の表舞台の主人公が4人の登山家なら、裏舞台の主人公はアイガー北壁への登頂を取材するベルリン新聞社のアーラウ（ウルリッヒ・トゥール）とアシスタントでカメラウーマンのルイーゼ（ヨハンナ・ヴォカレク）。この2人を含む各国からの取材陣は、アイガー北壁にチャレンジする登山家たちを、「高みの見物」さながらに、山麓にある高級ホテルのバルコニーから取材していた。バルコニーに設置されている大きな望遠鏡は東京タワーや通天閣に設置されている望遠鏡よりはるかに高級なのかもしれないが、ホントにあんな望遠鏡で北壁を一步一步歩いている4人の姿が見えるの？また、ルイーゼは何度もカメラのシャッターを押していたが、望遠レンズもつけないままで4人の姿を写せるの？

それはともかく、「なるほど、これが新聞記者魂！」と感心したのは、アーラウが言う「登頂に成功したら、あるいは失敗して事故になれば記事になるが、失敗して下山したのでは記事にならない」との言葉。なるほど、そりゃそうだ。そんな新聞記者魂に固まったアーラウは、登山隊が下山を開始したとの報告を聞き、「ベルリンへ帰ろう」と言い始めたが、それに納得できないのがルイーゼ。つまり、トニーの元恋人でもあり、登頂を開始する直前にトニーからこれまでの登頂記録を綴ったノートを預かったルイーゼは、猛吹雪の中で下山を開始したトニーたちが心配でたまらなくなり、もはや写真撮影どころではなくなってしまった。言ってみれば、順調に前進している間は客観的に新聞社のカメラウーマンとして登山隊をみるのができていたが、生命の危険を冒しながら下山しているトニーたちの姿は、もはや客観的な立場で見ることができなくなったというわけだ。

しかして、今やカメラウーマンとしての立場を放棄し、トニーの（元）恋人という立場のみでトニーの安否を気づかうルイーゼが、以降とった行動とは？

「ヴィリー切り」という選択肢は？

歩行不能のため巨大な荷物状態と化したヴィリーを3人が力を合わせて下山させていくのは至難のワザ。だって心身ともに疲れ果てている他の3人だって、自分一人が下山するだけで大変なのだから。したがって、トラブルが起きるたびに「こんなことになったのは、お前のせいだ！」と言いたいのは当然だが、それを言っても状況が改善しないことはわかり切っている。そこで、3人とも口にはしないが、ハラの中で思っていることは、「あそこでヴィリーを見切っていれば・・・」という理論上可能な選択肢。現に、ヴィリーが文字どおり「お荷物」となったため次の事故が起き、エディはもとよりアンディまで命を失うことになるのだから。

そこで思い出すのが、昨年12月の冬の富士山で、遭難した同行の2人を残して一人下山した元F1レーサーの片山右京の話。片山氏は「戻るべきか、いてあげるべきか」と迷

ったあげく、「自分一人では下ろせないことが分かっていたし、たくさんの人の手が必要だと考え、下山する判断をした」とのことだが、その当否は？そんな片山氏の判断を参考にすれば、何としてもヴィリーを連れて下山するという3人の決断の当否は？ヴィリーを残していく＝「ヴィリー切り」という選択肢はきっと悪魔の誘惑だろうが、ホントにその選択肢はなかったの？

ここでも、「天は我々を見放した」・・・

『劔岳 点の記』を初監督した木村大作が、以前撮影を担当したのが森谷司郎監督の『八甲田山』(77年)。そこでは、北大路欣也扮する神田大尉の「天は我々を見放した」とのセリフが大流行した。『アイガー北壁』が実話にもとづいた映画なら、『八甲田山』も実話にもとづいた映画。しかも、「雪中行軍」をテーマとした『八甲田山』は神田大尉の死亡をはじめ多大の犠牲者を生むことになったが、『アイガー北壁』が描くのも、4人の若き登山家の悲劇的な死。アイガー北壁の初登頂は1938年のドイツ隊の成功まで待たなければならぬ。

本作前半は多くの取材陣の応援を含めてスクリーン上は明るいが、後半は一転してスリリングな4人の苦闘が描かれる。中盤の1つのハイライトは、お荷物状態となったヴィリーと自分の体重の重みでハーケン(岩の割れ目に打ち込む釘)が抜けそうになったため、アンディが自ら命綱のザイルを切断するシーン。トニーからの「早く上がって来い!」「ハーケンが抜けそうだ!」との声を聞きながら、自らザイルを切断したアンディの無念さは？また、それに何も手を貸してやることのできないトニーの無念さは？

そんな無念さは、ラストにおいて更に顕著になる。アンディがザイルを切ったため自分の身を守ることはできたものの、今やトニーも行動を起こすことは不可能で助けを呼ぶしかないが、猛吹雪の中果たして誰が救いの手を？そんな状況下で展開される、ラストに向けたハイライトシーンはホントに涙をそそる。とりわけ、救援隊がすぐ近くまで到着しながら、あとメートルがなぜ進めないの？また、なぜあとメートルのザイルがないの？そんなこんなを考えると、私はここでも思わず「天は我々を見放した」のセリフを叫びたくなったが・・・。

女の愛はどこまで届く？

本作では、前半は存在感の乏しい(?)カメラウーマンのルイーゼが、後半では女の愛はさすがにすごいと思わせる熱演をみせる。ちなみにプレスシートを読んで、決して美人とは思えないルイーゼ役のヨハンナ・ヴォカレクが、配給会社ムービーアイ・エンタテインメントの倒産によって急遽日本での公開が取りやめとなった問題作『パーダー・マインホフ 理想の果てに』(08年)に、グドルン・エンスリン役で出演していた女優だとわかってビックリ。『パーダー・マインホフ 理想の果てに』では、女だてらに銃をぶっ放すド

イツ赤軍の騎士を演じたヨハンナ・ヴォカレクが、本作後半ではカメラウーマンの仕事に縁を切り、ひたすらトニーの無事な下山を待ち続けるだけでなく、何ともしもすごい勇気のある行動をみせる女性像を感動的に演じている。

北壁の山麓に建築された高級ホテルに多くの取材陣が乗り込んできているのは、観光客用にユングフラウ鉄道とその最終駅であるアイガーヴァント駅というインフラが整備されているため。日本でいえば、こりゃさしずめ立山黒部アルペンルートのトロリーバス？そこまでは十分理解できるが、後半の主要な舞台の1つとなる山の中を通っている坑道はその理解が少し難しい。トニーは「赤い断崖」付近で大事故に遭って立ち往生しているわけだが、トニーを心配するルイーゼが一人この坑道を通って坑道口から外に出て、猛吹雪の中で声の限りに叫ぶと、その声がトニーに届いたからすごい。トニーからの反応を確認し、ルイーゼは下山中のトニーが近くにいると確信。そんな喜びにうちふるえたルイーゼはトニー救助のため救援隊の派遣を懇願するが、さてそれに対して村人たちは？

『バーダー・マインホフ 理想の果てに』でみせた姿とは全く異質の、かつての恋人トニーに対してルイーゼがみせる「これぞ女の愛！」の姿をじっくりと堪能したい。

2010(平成22)年2月4日記

100万人から4000万人・1600万世帯へ！

年収25万円(約330万円)以上から、年収約10万円(133万円)以上へ。支給対象者数100万人から、4000万人・1600万世帯へ。さらに、現金だけではなく、銀聯(ぎんれん)カードの利用もオーケーに？これが何の話かわからない人は、完全に時代の流れに遅れているからご用心。

これは来る7月1日から開始される中国人観光客向けの査証(ビザ)発給条件緩和の話だ。経済不況と消費低迷が続く日本では6月1日から子ども手当が支給されるが、そんなものは焼け石に水。これに対して、来日した中国人観光客の金の使い方はケタ違い。団体で大学して来日した彼らが銀座で高級ブランド品を買い漁り、バスで乗りつけた家電

量販店でお土産用のデジカメ、時計、炊飯器を大量に買いつける風景は今や日常化した。その実態は大阪でも同じだ。これは従来の富裕層だけができたこと？いやいや、そうではなさそうだ。

年収約10万円以上の中間層が何百万人も日本観光に訪れれば、日本の小売り、レジャー交通、ホテル関連業者はホクホク。中国人観光客様々だが、ホントにそれでいいの？7月1日投開票予定の参議院選挙では民主党の惨敗が予想されるが、それによって起きる再度の衆参ねじれ現象による政治の機能不全が続くと、日本国の行く末は？10年後、20年後、ひょっとして日本は経済的にも軍事的にも中国の植民地に？

2010年(平成22)年6月1日記